

農林水産大臣賞（優秀賞）

奇祭「水止舞」が教えてくれること

東京都

東京都立桜修館中等教育学校

三年

南 穂香

私の住んでいる地域では、毎年七月に「水止舞」という不思議な祭りが行われる。名前の通り雨を止める祭りなのだが、なぜか観客までもが水をかけられ、びしょぬれになる。幼い頃、家族と見に行った私は、突然水をかけられて驚いた。周りの人たちも笑いながら水を浴びていた。その様子を見て、私は不思議に思った。雨を止めるための祭りなのに、なぜ水をかけるのだろう。この疑問が、私が水について考えるきっかけになった。

この謎を解くため、私は祭りの由来を調べてみた。すると、この祭りは、今から約七百年前の出来事がきっかけで始まったという。当時、干ばつに悩む人々のため、とある僧が雨乞いの祈禱を行うと、見事に雨が降った。しかしその二年後、今度は雨が降り止まず、水害となり、多くの人が他国へ逃げる事態となった。そこで、その僧は「水止め」の儀式を行った。すると雨が止み、晴れたため、それ以来この儀式は「水止舞」として続けられるようになったという。現在の「水止舞」は、前半が雨乞い、後半が雨止めの儀になっていてこの雨乞いの際に周りに水をかけるのだそうだ。

「雨乞いの後に雨止めをするなんて、勝手すぎる」と私は思った。しかし、考えてみると、それだけ昔の人にとって、水は重要だったということだ。雨が降らなければ作物が育たない。そうすると食べるものがないくなってしまい、命に関わる。けれども雨が降りすぎれば洪水となり、家や田畑が流されてしまう。これも命に関わることだ。水がないと生きていけない。だがありすぎても生きていけない。それを当時の人々は理解していた。しかし、その時代、自然の影響をコントロールすることはできなかったため、祭りや祈りを通して水の力と向き合っていたのだらう。

現代に暮らす私たちはどうだろう。ダムや堤防が作られたり、貯水施

設が整備されたりと、自然の影響をある程度抑えられるようになった。天気予報によって、今後の天気もわかる。自然そのものをコントロールすることは難しいが、その影響を減らすために技術や知識を使い、対処するようになってきている。もちろんこれは素晴らしいことだと思う。

しかし、その安全になれることで、水の怖さや大切さを忘れてしまう人もいるのではないだろうか。昔よりも水の力を身近に感じる経験が少なくなつた。雨が多く降っても、大きな被害はあまり出ない。水道も整備され、蛇口をひねればすぐに安全な水が手に入る。そんな環境が当たり前になったことで、水は限られた量しか存在せず、命を支える存在であると同時に人々を脅かす存在であるという感覚が薄れてしまっているように感じる。

もちろん、それを知ったところで渇水や洪水がなくなるわけではない。自然そのものを完全に支配することはできないのだから。特に近年は地球温暖化により異常気象も増えており、日本も例外ではない。このさき、ダムや堤防では防げないような水不足や大洪水が起きる可能性だってある。そんな時、困るのは誰なのか。水の大切さや性質を知っていれば、いざというときも落ち着いて判断し、行動できるかもしれない。しかし知らなければ命や生活に被害が出るかもしれない。だから、水を学び、その性質を理解し、対処の方法を考えることは、身を守るために重要だと思う。

こう考えると、「水止舞」が七百年も続いてきた理由もわかる気がする。昔の人は水の力を肌で感じ、祭りや祈りを通して向き合ってきた。現代の私たちも、水を身近に感じ、学び、考え、行動していくことが必要だ。水の安全になれている今だからこそ、改めて水の性質や大切さについて学ぶべきことがある。「水止舞」は、私たちにそう伝えてくれているのだらう。